

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00733

研究課題名(和文)牛馬文化の渡来と変容過程の解明による新たな列島史像の構築

研究課題名(英文) Reception and transformation of horse and horse culture in the Japanese archipelago: towards a new historical perspective

研究代表者

植月 学 (Uetsuki, Manabu)

帝京大学・付置研究所・准教授

研究者番号：00308149

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,300,000円

研究成果の概要(和文)：牛馬に関わる文化複合の歴史の変遷と地域性を明らかにした。歴史の変遷については大陸の影響が残る古墳時代から古代において若齢での屠畜や肉食が行われていたのに対し、中世以降には都市外縁への処理場所の移転や、中世城館で牛馬肉食が常習的ではなかったことを明らかにした。牛馬肉食の忌避や穢れ意識は列島の家畜利用の特徴とされるが、その成立過程を考古学的に跡付ける見通しが得られた。地域の様相については特に北東北における馬利用の変遷が明らかになった。古代には同時期の東国よりも東国古墳時代との共通性が認められ、律令国家との歴史的關係性の差異が馬利用のあり方にも反映されていることが窺われた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多様な研究分野と分析手法を組み合わせ、牛馬のライフサイクル全体を研究対象とすることで、牛馬利用の包括的検討が可能となり、歴史の変遷や地域の様相をより詳細に復元する方法を開拓できた。牛馬文化が単に動物考古学的なテーマにとどまらず、地域間関係や地域性の成立といったより大きな歴史の動向を反映しており、動物利用という視点からも歴史の再構築が可能であることを示した。古墳時代を対象とした『馬の考古学』(雄山閣)、古代を対象とした『馬と古代社会』(八木書店)の刊行も重なり、複数の分担者がこれに関与することで研究成果を広く社会に還元することもできた。

研究成果の概要(英文)：Historical transition and regional characteristics of the cultural complex related to cattle and horses were clarified. The slaughter of juvenile animals and meat consumption existed in the Kofun period, when the influence of the continent remained. In contrast, after the medieval period, butchering sites were relocated to the outskirts of the city and meat consumption was not habitual in medieval castles. Such avoidance of beef and horse meat consumption and carcasses is characteristic of the livestock use in the Japanese archipelago, and this study has paved a way to archaeologically trace the formation process of such habit. Regarding the regional aspect, the transition of horse use, especially in the northern Tohoku region was clarified. In classic period, the area had more in common with the Kofun period Togoku region than the contemporaneous Togoku region, and it was assumed that the difference in historic relation with the central government was reflected in the use of horses.

研究分野：動物考古学

キーワード：牛馬 動物考古学 畜産 同位体分析 脂質分析 古病理 牛馬肉食 動物供犠

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

牛と馬は家畜の種類に乏しい日本列島において、運輸、農業、軍事の面で、あるいは食料、皮革などの資源として日本の歴史に大きな影響を及ぼした。固有の歴史をたどった両種はこれまで個別に研究されることが多かった。研究分野の面では主に政治史、制度史の中での牛馬の位置付けを扱う文献史学、年代や分布、遺構・遺物との関係を追究する伝統的な考古学、牛や馬遺体の属性から利用方法を追究する動物考古学、肉眼では見えなかった牛馬利用の痕跡を探る考古化学など個別の分野から考察される傾向にあった。このような牛馬に関わる個別的研究を横断し、統合する研究が求められていた。

2. 研究の目的

牛馬利用にかかわる集団やその技術、思想などの文化複合を牛馬文化と定義し、動物考古学、伝統的な考古学、考古化学、文献史学の協働により、両種に関わる文化複合の受容、広がり、変容過程を比較、解明することを目的とした。従来の研究では対象となりにくかった動物遺体からみた生産技術や思想も含めた文化複合に光を当てることで、牛馬の歴史にとどまらず、背後にある人の移動や交流、思想や社会構造の変化を浮かび上がらせ、新たな歴史像を描き出すことを目指した。

3. 研究の方法

牛馬文化の諸要素の時期的変遷や地域的特徴を明らかにするために、各研究分野の特性を生かして牛馬のライフサイクルの各段階を研究対象とした。特に馬については近年出土遺体への適用が進む同位体分析による産地、移動、食性の検討、古病理学的分析や四肢骨プロポーションによる用途の検討、解体痕の詳細な分析による死後の用途の検討など国内遺跡での実践例の少ない手法を用いた。

分析の中心となる時代は古墳時代から中世、地域は東日本に設定した。特に伝統的な馬産地でありながら、これまで本格的な考古学的検討がほとんどなされてこなかった東北地方北部太平洋岸に焦点を当てた。また、列島への牛馬文化渡来の鍵となる地域でありながら、牛馬遺体や畜産史に関する情報に乏しい朝鮮半島も比較対象とした。

4. 研究成果

馬についてはライフサイクルの諸段階を検討することで、利用実態の時期的変化や地域性が明らかになった。牛については良好な遺跡に恵まれず、方法論的にも開発途上であることから、死後の利用など部分的な解明にとどまった。地域的には当初の計画通り歴史的馬産地である北東北における馬利用の実態について、古代から中世までの変遷を解明することができた。列島外との比較については新型コロナウイルス蔓延の影響により十分な調査が行えなかったが、韓国の古代馬、およびキルギスの牛馬遺体との比較により列島の牛馬利用の特徴を浮き彫りにすることができた。

(1) 産地と消費地

酸素同位体分析により馬の産地と消費地での変動パターンが異なることが明らかになった。伝統的な馬産地である北東北太平洋岸に位置する青森県林ノ前遺跡(古代)や根城跡(中世)では変異に乏しく、産地に留まった個体が多かった(⑤、⑨)。根城跡ではストロンチウム同位体比の変異も小さかった。これに対して、下総国府域に位置する千葉県北下遺跡(古代)では個体内変動、個体間変異ともに大きかった。これは多様な履歴を持つ個体が国府周辺に集積されたことを示唆する。一方で、変動のタイミングには共通性が見られ、3歳前後に集中していた。この年齢は文献に見られる牧馬選抜のタイミングと整合的であった(①、⑧)【図1】。

(2) 食性・給餌

炭素同位体比も産地では変動パターンに乏しいのに対し、消費地では多様なパターンを示し、変化のタイミングが近似していた。雑穀給餌の多寡を示すと理解されるC4植物の摂取割合は北東北中世の根城跡で高く、伝統的な雑穀栽培地域という地域的特徴と合致する一方、古代の林ノ前遺跡ではさほど高くはなかった。やはり伝統的に雑穀栽培が盛んであった山梨県域でも地域全体としては高い傾向にあった。個体内での変動はいくつかのパターンに分類できた(⑩)。変動の大きい個体はこれまでに指摘されてきたような良馬への雑穀給餌割合の増大とも解釈できる。これに加えて、上記の変動年齢の共通性も踏まえれば、移動に伴う食性の変化も考慮する必要性が見えてきた(①)。変動に乏しい個体のうち、一貫して高い炭素同位体比を示す個体は給餌管理の度合いが比較的強い舎飼のような飼育環境下にあった可能性も考えられた。このような個体は古墳時代から中世まで認められた(⑬)。韓国の新羅時代の馬の分析でも同様に複数のパターンが認められ、列島の馬産のルーツである朝鮮半島においてすでに多様な給餌様式が存在したことが示唆された(⑦)。

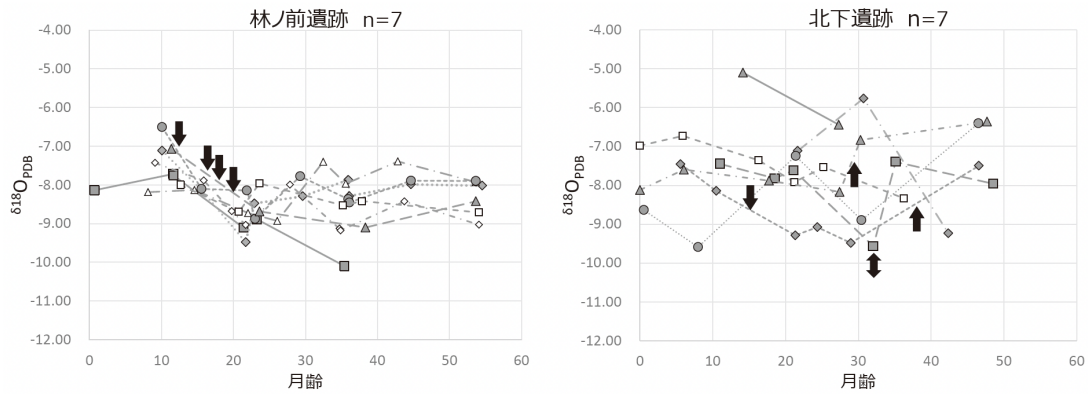


図1 酸素同位体比変動パターンの比較

林ノ前は個体間の差、個体内変動ともに小さい（産地的）。北下は個体間の差、個体内変動が大きい（消費地的）。矢印は個体内で大きな変動が見られる時期（文献①）。



図2 千葉県須和田遺跡出土馬の病理

左より第2前臼歯の斜角(bevel)、銜痕、切歯骨の変形（文献③）

(3) 生前の用途

国内ではまだ研究例の少ない古病理学的分析を通じて馬の生前の用途を検討した。乗用の証拠としては下顎第2前臼歯近心に残る銜痕を比較した。古代の林ノ前遺跡(⑫)や中世の由比ヶ浜中世集団墓地遺跡(⑥)では比較的高い割合で認められ、多くの個体が乗用とされていたことが示唆された。これに対して、青森県の中世城館である根城跡や大光寺新城跡では認定率は低く、乗用以外の用途に用いられた個体も一定数存在したと推測された(②、⑨)。

千葉県須和田遺跡出土の古代馬は銜痕に加えて咬合面の斜角(bevel)の存在により、銜を咬ませていたことがより明確な例であった。本個体は頭絡による圧迫の結果とされる切歯骨の変形(窪み)も認められ、かつその深さは左右で差があった【図2】。モンゴルにおける先行研究との比較から、この左右差は乗用法を反映している可能性が考えられた(③)。今後より多くの国内遺跡出土馬と比較することで、乗馬法に応じた変化傾向を抽出できると期待される。

足への負荷の度合いを反映するとされる中手骨・中足骨間靭帯の骨化程度も調査した。中足骨の骨化はどの遺跡でも軽微だったが、中手骨では差が認められた。中世の鎌倉(由比ヶ浜中世集団墓地遺跡)では比較的軽微なのに対し(⑬)、青森県根城跡、大光寺新城跡ではより骨化が進行していた。両遺跡は鎌倉に比べて小型個体も多かった。いずれも城館遺跡であり、特に根城跡は南部馬で名を馳せた馬産地に位置する。以上の結果は意外なものだが、上記の銜痕認定率の低さも考慮すれば、小型の駄馬も含めた多様な個体の利用が北東北の中世城館における利用実態であったと推定された(②、⑨)。

なお、キルギス共和国アク・ベシム遺跡出土馬は銜痕がほとんど認められず、中手骨間靭帯の骨化程度は強かった。本遺跡はシルクロードの交易都市であり、馬の多さを特徴とする。馬は四肢骨打割の度合いの高さから食用となった事が明らかであり、乗用とされなかった馬(荷駄馬、ないし若齡処分個体)が食用とされた例と推測される(⑪)。

馬の四肢骨プロポーシオンが遺跡によって異なる事も明らかになった【図3】。須和田遺跡の古代馬は末端に近い四肢骨ほど相対的に長く、在来馬や既知の出土馬のいずれとも異なっていた。アラブ馬との類似性や上記の古病理学的所見、山間部・島嶼に適応した在来馬との対照性からはより走行適応したプロポーシオンと推測された(③)。なお、本個体はサイズから見れば小型であり、筆者がこれまで想定してきたような大型=乗用、小型=駄用という単純な図式は再考を要する。これに対して、末端の四肢骨が短い青森県大光寺新城跡の集団は逆に走行には適していなかったと推測された(②)。この結果は先述の古病理学的分析から導かれた非乗用馬の存在とも調和的であった。なお、両遺跡ともに日本在来馬のプロポーシオンとは異なっており、在来馬の計測値に基づいた四肢骨長からの体高推定値の扱いには注意を要する点も指摘した(③)。

(4) 死亡年齢と屠畜

死亡年齢からみた馬利用の特徴については大きく2点にまとめられる。一点目は産地における幼齢個体の多さである。同位体分析においても産地的傾向が認められた青森県林ノ前遺跡や根城跡、あるいは同県大光寺新城跡では1歳以下の個体が高率で認められる点が特徴的であった。この特徴は生産地における死産や病気による一定割合の幼齢馬（胎児）の死亡を反映すると理解された（②、⑨、⑫）。この年齢群は消費地と想定された鎌倉市由比ガ浜中世集団墓地遺跡や千葉県北下遺跡ではほとんど認められない。

2点目は成獣の屠畜パターンである。東国での時期別の比較では古墳周辺での6歳前後での供犠、古代の4歳前後での選抜→処分→利用、中世におけるピークを過ぎた個体の10歳前後での処分、近世東国農村での寿命までの飼育（処分の不在）などが本研究開始時に明らかになっていた（⑮）。本研究ではさらに古墳時代の集落出土馬が古墳周辺の供犠と類似の年齢構成を示すことから、利用後の食用を前提とした古墳時代の一般的屠畜年齢を反映する可能性を論じた（⑬）。この年齢構成は東国古代とは異なる一方、北奥古代の林ノ前遺跡と類似していた。東国古墳時代と律令の枠外で発達した北奥古代の馬利用の類似性、および律令国家の管理下で進められた東国古代の馬利用との対比は両地域の馬利用の関係性とその後の変容過程の差を示している可能性がある（⑤）。また、古墳時代集落における馬の出土量の少なさと、古代における若齢馬のシステムチックな処分の対比からは両時期の馬生産規模の差も窺えることを指摘した（⑤、⑬）。

なお、アク・ベシム遺跡では5歳前後と12歳前後の双峰性のピークをもつ屠畜パターンを示した。民族例との比較からは前者は繁殖における余剰個体（主に牡馬）、後者は繁殖期を過ぎた個体（主に牝馬）の処分と解釈された（⑪）。列島（東日本）との比較では前者は古墳～古代に、後者は中世のパターンに類似する。中世における前者の欠落は列島的な変容（若齢馬処分習慣の衰退）との見通しを持っているが、地域的な隔たりが大きく、間をつなぐ地域における比較検討が今後の課題である。

(5) 儀礼

古墳時代における古墳周辺における供犠の実態については遺存状況不良により検討が困難な場合が多いが、長野県や山梨県の事例では祭壇状遺構の存在や出土状況の検討、死亡年齢により、前庭部や墓道周辺で頭部の切断や肉食を伴う儀礼が行われた可能性を論じた（⑬）。

古代の儀礼については千葉県北下遺跡で旧河道より4歳前後の若齢馬が多数出土しており、祭祀遺物の共伴も踏まえ、水辺の祭祀における利用が想定された。筆者が従来想定してきた古代馬の若齢での選抜と処分との見方との関係が問題となるが（⑮）、選抜・処分後に祭祀に供される場合もあったと解釈した（⑧）。近隣の須和田遺跡では古代の大型土坑より牛馬遺体が出土しているが、部位組成が特異であり、いずれも右の四肢骨が欠落していた（牛では右後肢は存在）。後述する解体痕から食用となったことは明確である。右側の欠如については『延喜式』に見える積奠での鹿、猪の供献部位との共通性から、祭祀に供されたと推測した（③）。古代儀礼における牛馬の利用が窺える例として重要である。

(6) 死後の利用

古墳時代～中世において自然死ではなく、屠畜された個体が多かったことは先述の馬の死亡年齢構成からも明らかである。屠畜後の用途については部位組成、解体痕、土器の残存脂質分析により検討した。

解体痕からは腱、脳漿、肉の利用が明らかになった。腱利用は馬の四肢骨末端の特徴的切痕により青森県林ノ前遺跡（古代）において国内で初めて報告した（⑫）。その後、鎌倉市由比ガ浜中世集団墓地遺跡（中世）でも同様の切痕を多数確認した（⑥）。脳漿摘出の痕跡と推測される頭頂～後頭部の破壊については千葉県須和田遺跡（古代）（③）と由比ガ浜中世集団墓地遺跡で確認した（⑥）。特に後者は多数かつ大部分の個体に認められることから、徹底した利用がうかがえた。東国での確認例はこれまで少なく、その用途としては松井章による先駆的研究で指摘されたように（松井 1987）、皮鞣しにおける利用が想定され、皮革加工の間接的証拠とみなせる。

食肉については先述のように古代の須和田遺跡において牛馬の部位組成と解体痕から想定された。特に牛については①四肢骨の肉が付随する部位のみが出土し、それ以遠は切り落とした痕跡があること、②四肢骨骨幹に多数の切痕があり、除肉目的としか考えられないことから、肉食の結果である事が明瞭であった。筆者はかつて東国古代の遺跡出土牛の年齢構成や部位組成から

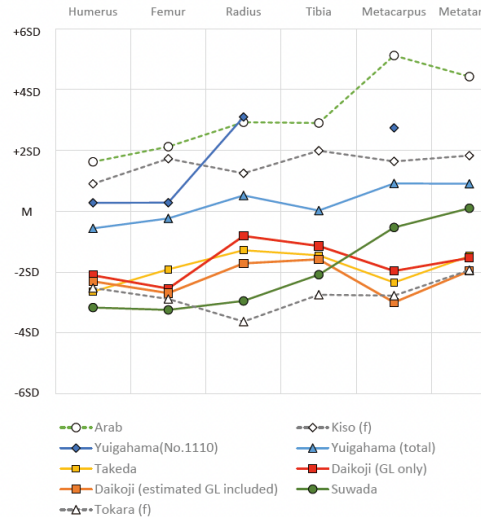


図3 四肢骨プロポーシヨンの比較

須和田遺跡では末端ほど長く、大光寺新城跡や武田氏館跡では逆に末端が短い。いずれも在来馬に類似するパターンは見出せない。

牛肉食の盛行を論じた事があったが(植月 2014)、須和田遺跡例はより直接的な証拠として注目される。

古代の牛馬肉、もしくは脂の利用は土器の残存脂質分析からも明らかになった。山梨県百々遺跡は牛馬遺体が多数出土した平安時代の集落遺跡であり、若齢主体の馬の年齢構成からは選抜・処分を経た斃牛馬利用の遺跡と推定された。土器の残存脂質分析では反芻動物の肉・脂と非反芻動物の肉・脂の加工を示唆する結果が得られている。動物遺体組成との比較からは前者は主に牛、後者は主に馬である可能性が高い。土器による牛馬の加工を示唆する例として貴重な事例となった。一方で、牛の用途として予想された蘇の生産(乳利用)を裏付ける結果は得られず、少なくとも土器による加工は行われていなかったと推定された(16)。

中世の青森県大光寺新城跡では牛馬遺体ともに多数の解体痕が認められ、食肉目的と考えられる例も多かった。ただし、その位置はランダムで解体技術としても稚拙な印象であり、日常的に解体を行っていたかは疑問も残った。由比ガ浜集落墓地遺跡で見られた腱、脳漿利用を窺わせる定型的解体痕とも対照的であった。したがって、本例は北東北の中世城館において常習的肉食が行われていたことを必ずしも示すものではなく、籠城などの非常時にやむを得ず行われた、すなわち平時においては牛馬肉食が行われていなかった可能性が考えられた(2、14)。由比ガ浜中世集落墓地遺跡については都市・鎌倉の外縁に位置し、西日本において論じられているような斃牛馬処理空間の都市空間から都市外への移転(松井 2004)が東国の中世においても進行していたことを示唆する。

以上のように古代(前半)までは牛馬の食肉利用が国府周辺も含めて認められるのに対し、中世都市では外縁に集約されていた点や、中世城館で日常的ではなかったと見られる点は文献史学から論じられている平安後期以降の牛馬肉食の忌避傾向とも調和的であった(平林 2007、中澤 2018 など)。

<引用文献>

本研究による成果

- ① 植月 学・丸山真史 (印刷中)「同位体分析からみた馬の来歴と産地・消費地―一部屋北遺跡と東日本の比較―」『牧の景観考古学―古墳時代初期馬匹生産とその周辺』六一書房
- ② 植月 学 2022『津軽中世馬の研究―青森県平川市大光寺新城跡出土動物遺体調査報告―』110pp.
- ③ Manabu Uetsuki, Hayao Nishinakagawa, Naomitsu Yamaji. 2022 The use of horses in classical period Japan inferred from pathology and limb bone proportion. *Asian Journal of Paleopathology*, 4, 13-28.
- ④ 植月 学・金子浩昌・山路直充 2022「古代の牛馬肉食と祭祀利用―須和田遺跡大型土坑出土牛馬遺体の形成過程による検討―」『市史研究いちかわ』13、49-67
- ⑤ 植月 学 2021「動物考古学からみた馬匹生産と馬の利用」『馬と古代社会』八木書店 129-151
- ⑥ 植月 学 2021「古病理と解体痕による中世馬の用途の検討」『日本動物考古学会第8回大会プログラム・抄録集』20 日本動物考古学会
- ⑦ 植月 学・覚張隆史・諫早直人・丸山真史・青柳泰介 2021「新羅馬」の炭素・酸素同位体比分析『動物考古学』38、61-66
- ⑧ 植月 学・覚張隆史・金井拓人・小林信一 2021「下総国府域出土馬の履歴をさぐる―北下遺跡出土馬の炭素・酸素同位体比分析による検討―」『研究連絡誌』85、30-40 公益財団法人 千葉県教育振興財団
- ⑨ 植月 学・覚張隆史・櫻庭陸央・船場昌子 2021「中世南部氏の馬利用―根城跡出土馬の動物考古学・同位体化学的研究―」『帝京大学文化財研究所研究報告』20、233-246
- ⑩ 植月 学 2020「地耕免遺跡のウマ遺体-飼育環境と殺馬儀礼の再検討」『山梨県考古学協会誌』27、113-126
- ⑪ 植月 学・新井才二 2020「キルギス共和国アク・ベシム遺跡における動物資源利用」『帝京大学文化財研究所研究報告』19、35-60
- ⑫ 植月 学・覚張隆史 2020「青森県における古代の馬利用-林ノ前遺跡出土馬の動物考古学・同位体化学的研究」『青森県埋蔵文化財調査センター 研究紀要』25、51-65
- ⑬ 植月 学 2019「東国の古墳時代馬」『馬の考古学』255-264 雄山閣
- ⑭ 植月 学 2019「歴史を動かした青森の馬」『大学的 青森ガイド―こだわりの歩き方(弘前大学人文社会科学部編)』211-223 昭和堂
- ⑮ 植月 学 2018「東国における牛馬の利用」『季刊考古学』144、47-50 雄山閣
- ⑯ 庄田慎矢・植月 学・タルボット ヘレン・クレイグ オリヴァー 2020「土器残存脂質からみた平安時代の牧における動物利用」『日本文化財科学会第37回大会 研究発表要旨集』74-75 日本文化財科学会

その他引用文献

植月 学 2014「古代東国における牛肉食の動物考古学的検討」『山梨県考古学論集VII』325-336

中澤克昭 2018『肉食の社会史』山川出版社

平林 章仁 2007『神々と肉食の古代史』吉川弘文館

松井 章 1987「養老厩牧令の考古学的考察―斃れ馬牛の処理をめぐって―」『信濃』39-4、231-256

松井 章 2004「近世初頭における兵牛馬処理・流通システムの変容」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会 50周年記念論文集 407-416

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計50件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 Manabu Uetsuki, Hayao Nishinakagawa, Naomitsu Yamaji	4. 巻 4
2. 論文標題 The use of horses in classical period Japan inferred from pathology and limb bone proportion	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Asian Journal of Paleopathology	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32247/ajp2022.4.4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 植月学・金子浩昌・山路直充	4. 巻 13
2. 論文標題 古代の牛馬肉食と祭祀利用 - 須和田遺跡大型土坑出土牛馬遺体の形成過程による検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 市史研究いちかわ	6. 最初と最後の頁 49-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 植月学・覚張隆史・金井拓人・小林信一	4. 巻 85
2. 論文標題 下総国府域出土馬の履歴をさぐる - 北下遺跡出土馬の炭素・酸素同位体比分析による検討 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 研究連絡誌(千葉県教育振興財団文化財センター)	6. 最初と最後の頁 30-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 植月学・覚張隆史・櫻庭陸央・船場昌子	4. 巻 20
2. 論文標題 中世南部氏の馬利用 - 根城跡出土馬の動物考古学・同位体化学的研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 帝京大学文化財研究所研究報告	6. 最初と最後の頁 233-246
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 植月学	4. 巻 91(8)
2. 論文標題 動物利用からみたアク・ベシム遺跡	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金属	6. 最初と最後の頁 61-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人 (張嘉欣・石艶艶・尤悦訳、菊地大樹校)	4. 巻 11
2. 論文標題 馬文化在東亞的東伝進程	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北方民族考古	6. 最初と最後の頁 338-351
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 曹操高陵出土馬具が語るもの	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 技と慧眼 塚本敏夫さん還暦記念論集	6. 最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 大和の木製鞍と古墳時代の馬匹利用	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国家形成期の近畿地方における馬と塩の関係に関する基礎的研究	6. 最初と最後の頁 103-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地大樹	4. 巻 -
2. 論文標題 秦馬の実像	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 秦の淵源 - 秦文化研究の最前線 -	6. 最初と最後の頁 124-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15083/0002000777	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村上夏希・庄田慎矢	4. 巻 3
2. 論文標題 須恵器の残存脂質分析に向けて 胎土の性状から見た検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈文研論叢	6. 最初と最後の頁 13-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shoda Shinya	4. 巻 62
2. 論文標題 Seeking Prehistoric Fermented Food in Japan and Korea	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Current Anthropology	6. 最初と最後の頁 S242-S255
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1086/715808	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 丸山真史	4. 巻 158
2. 論文標題 人と動物の関係史	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 97-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸山真史	4. 巻 -
2. 論文標題 上牧遺跡の動物遺存体	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 上牧遺跡	6. 最初と最後の頁 409-410
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平野修	4. 巻 38
2. 論文標題 甲斐の国の古代製塩	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 別冊季刊考古学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 植月 学	4. 巻 -
2. 論文標題 動物考古学からみた馬匹生産と馬の利用	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 馬と古代社会	6. 最初と最後の頁 129-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 馬匹生産地の形成と交通路	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 馬と古代社会	6. 最初と最後の頁 35-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平野 修	4. 巻 -
2. 論文標題 東国の牧遺構	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 馬と古代社会	6. 最初と最後の頁 87-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 植月 学, 新井オ二	4. 巻 19
2. 論文標題 キルギス共和国アク・ベシム遺跡における動物資源利用	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 帝京大学文化財研究所研究報告	6. 最初と最後の頁 35-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 植月 学	4. 巻 27
2. 論文標題 地耕免遺跡のウマ遺体 - 飼育環境と殺馬儀礼の再検討 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山梨県考古学協会誌	6. 最初と最後の頁 113-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 植月 学, 覚張隆史, 諫早直人, 丸山真史, 青柳泰介	4. 巻 38
2. 論文標題 「新羅馬」の炭素・酸素同位体比分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 動物考古学	6. 最初と最後の頁 61-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 日本出土馬胄と馬甲 研究動向と出土事例紹介	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 馬 甲胄をまとう	6. 最初と最後の頁 158-181
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 綿貫観音山古墳出土馬具の系譜と製作地	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 第101回企画展 綿貫観音山古墳のすべて	6. 最初と最後の頁 198-207
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 日韓における馬胄・馬甲研究の現状と課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 柳本照男さん古稀記念論集 忘年之交の考古学	6. 最初と最後の頁 151-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 倭の馬具と加耶	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 馬を乗る加耶	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 日本のなかの牧畜文化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 和食文化学入門	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平野 修	4. 巻 58
2. 論文標題 日本列島への牛の導入と乳文化の展開	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山梨文化財研究所報	6. 最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸山真史, 覚張隆史, 田中元浩	4. 巻 -
2. 論文標題 ウシ・ウマに関する研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西庄遺跡の研究1-骨角器・牛馬編-	6. 最初と最後の頁 107-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸山真史	4. 巻 -
2. 論文標題 古代岩岐における動物利用	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古代世界の中の岩岐	6. 最初と最後の頁 111-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 植月 学	4. 巻 -
2. 論文標題 東国の古墳時代馬	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 馬の考古学	6. 最初と最後の頁 255-264
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 植月 学・覚張隆史	4. 巻 25
2. 論文標題 青森県における古代の馬利用-林ノ前遺跡出土馬の動物考古学・同位体化学的研究-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 青森県埋蔵文化財調査センター 研究紀要	6. 最初と最後の頁 51-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 和順 懐徳3号墳 出土 馬具の製作年代	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 和順 千德里 懐徳3号墳	6. 最初と最後の頁 173-186
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 騎馬民族論の行方	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 考古学講義	6. 最初と最後の頁 291-314
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 217
2. 論文標題 宋山江流域における馬匹生産の受容と展開	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 153-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 草原の馬具 東方へ与えた影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ユーラシアの大草原を掘る 草原考古学への道標	6. 最初と最後の頁 194-204
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 731
2. 論文標題 馬の流通, 馬による交通	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 月刊 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 15-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 150
2. 論文標題 古墳時代・古代: 馬具・馬	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 67-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸山真史	4. 巻 -
2. 論文標題 動物考古学による古墳時代のウマ研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 馬の考古学	6. 最初と最後の頁 240-248
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平野 修	4. 巻 58
2. 論文標題 日本列島へのウシの導入と乳文化の展開	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山梨文化財研究所報	6. 最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 日本列島出土初期高句麗系馬具について 長野県大星山2号墳出土馬具の検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 古代高麗郡の県郡と東アジア	6. 最初と最後の頁 141-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 東アジアにおける馬文化の東伝と加耶	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 加耶古墳群	6. 最初と最後の頁 193-233
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人・G.エレゲゼン・L.イシツェレン	4. 巻 101-1
2. 論文標題 モンゴルの匈奴墓出土馬具 轡を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 考古学雑誌	6. 最初と最後の頁 75-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 丸山真史	4. 巻 -
2. 論文標題 梶子遺跡における動物利用	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 梶子遺跡19・20次	6. 最初と最後の頁 91-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸山真史・覚張隆史・田中元浩	4. 巻 21
2. 論文標題 西庄遺跡で飼育されたウマ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 紀伊考古学研究	6. 最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武井紀子	4. 巻 -
2. 論文標題 青森の歴史を歩く	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大学的青森ガイド	6. 最初と最後の頁 105-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 植月 学	4. 巻 -
2. 論文標題 歴史を動かした青森の馬	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大学的青森ガイド	6. 最初と最後の頁 211-223
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計39件 (うち招待講演 20件 / うち国際学会 8件)

1. 発表者名 植月学
2. 発表標題 古病理と解体痕による中世馬の用途の検討
3. 学会等名 日本動物考古学会第8回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 曹操高陵出土馬具の提起する問題
3. 学会等名 国際学術シンポジウム 「インフラからみた古代東アジア都市の展開」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 鐙の出現 騎馬東伝の原動力
3. 学会等名 人文研アカデミー2021 シンポジウム 「考古学からみた古代東アジアの馬利用」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菊地大樹
2. 発表標題 秦馬の実像
3. 学会等名 秦の淵源 - 秦文化研究の最前線 - (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菊地大樹
2. 発表標題 養馬政再考
3. 学会等名 第十一届全国動物考古学研討会 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菊地大樹、覚張隆史、種建栄
2. 発表標題 西周王朝的養馬業
3. 学会等名 第三届中国考古学大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菊地大樹
2. 発表標題 牧馬の育成 - 中国古代養馬史の再構築 -
3. 学会等名 人文研アカデミー2021シンポジウム：考古学からみた古代東アジアの馬利用 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菊地大樹
2. 発表標題 馬を飼うー中国古代王権の実像ー
3. 学会等名 愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター 第30回アジア歴史講演会（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 植月 学, 覚張隆史, 諫早直人, 丸山真史, 青柳泰介
2. 発表標題 日韓古代馬の給餌様式 歯エナメル質の炭素安定同位体分析による検討
3. 学会等名 第63回 大韓体質人類学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 植月 学, 山路直充
2. 発表標題 千葉県市川市須和田遺跡出土古代馬の古病理と用途
3. 学会等名 第5回日本古病理学研究会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 庄田慎矢, 植月 学, タルボット ヘレン, クレイグ オリヴァー
2. 発表標題 土器残存脂質からみた平安時代の牧における動物利用
3. 学会等名 日本文化財科学会第37回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 庄田慎矢
2. 発表標題 土器に入れられた食材の多様性 - 新石器時代と青銅器時代の比較 -
3. 学会等名 第44回韓国考古学会全国大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 庄田慎矢, 村上夏希
2. 発表標題 サバ・タクサイ1・ノボイリノフスコエ2 遺跡出土土器の残存有機物に対する試験的分析の結果
3. 学会等名 オンラインセミナー カザフスタンにおける土器残存脂質分析の成果
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shinya Shoda, Natsuki Murakami, Akhan Onggaruly, Yana Lukpanova, Emma Usmanova, Elina Ananyevskaya, Helen Talbot, Giedre Motuzaitė-Matuzeviciute, Oliver E. Craig
2. 発表標題 Preliminary results of pottery organic residue analysis of Bronze Age to Early Iron Age, Kazakhstan
3. 学会等名 Beyond being a pastoralist in Central Asia “Margins or Nodes” concluding online conference（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 日向における馬生産のはじまりと国宝馬具の系譜
3. 学会等名 国際シンポジウム「国宝馬具とその時代～古代日向への騎馬文化の導入と展開～」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 菊地大樹, 覚張隆史, 曹龍
2. 発表標題 戦国秦の養馬技術
3. 学会等名 第63回大韓体質人類学会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 菊地大樹
2. 発表標題 秦帝国を支えた馬
3. 学会等名 人文研アカデミー2020 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 植月 学
2. 発表標題 アク・ベシム遺跡における動物資源利用
3. 学会等名 2019年度シルクロード学研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 植月学・覚張隆史
2. 発表標題 Multi-isotope Investigation of Horse Breeding in Japan
3. 学会等名 69th Annual Meeting of Korean Anatomists (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 植月 学
2. 発表標題 動物考古学から見た馬匹生産と馬の利用
3. 学会等名 古代交通研究会第20回大会「馬がつなぐ古代社会」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 植月学・寛張隆史
2. 発表標題 北東北における中世の馬生産 - 産地における考古化学的検討 -
3. 学会等名 日本文化財科学会第36回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 植月 学
2. 発表標題 Life and death of classical horses in Japan: pathology, mortality, and butchery
3. 学会等名 The Third Korea-Japan Paleopathology Forum (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 朝鮮半島における馬の普及と利用
3. 学会等名 考古学からみた東アジアの馬文化(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 4-5世紀 日本と加耶の馬具
3. 学会等名 第25回加耶史国際学術会議
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 馬匹生産地の形成と交通路
3. 学会等名 古代交通研究会第20回大会「馬がつなぐ古代社会」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丸山真史
2. 発表標題 動物考古学からみた馬の普及と利用
3. 学会等名 群馬県立歴史博物館開館40周年記念シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 菊地大樹・覚張隆史
2. 発表標題 先秦養馬技術考
3. 学会等名 第65回考古学研究会研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菊地大樹
2. 発表標題 動物考古学からみる中国古代養馬技術の形成過程
3. 学会等名 2019年駒沢史学会大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 庄田慎矢
2. 発表標題 最新の考古学研究の成果が示す人類の乳利用の歴史
3. 学会等名 ミルクで繋がる講演と交流の集い（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 庄田慎矢
2. 発表標題 質量分析計による過去の食と調理の研究
3. 学会等名 分析技術研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 庄田慎矢
2. 発表標題 :
3. 学会等名 際学会） （招待講演）（国
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 庄田慎矢
2. 発表標題 Biomolecular Archaeology in East Asia: Shedding new light on ancient cookery
3. 学会等名 School of Humanities and Social Sciences Nazarbayev University Seminar (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 庄田慎矢
2. 発表標題 クロマトグラフィーが切り開くマイクロ考古学の世界
3. 学会等名 第364回 ガスクロマトグラフィー研究懇談会 講演会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 植月 学
2. 発表標題 Archaeology of meat eating taboo in Japan: revealing unwritten history
3. 学会等名 13th ICAZ International Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 植月 学
2. 発表標題 青森県出土中世馬の動物考古学的研究
3. 学会等名 2018年度 東北史学会・弘前大学国史研究会合同大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 植月 学
2. 発表標題 Paleopathology of horse remains from Ak Beshim, Kyrgyz Republic
3. 学会等名 第3回日本古病理学研究会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丸山真史
2. 発表標題 奈良盆地における古墳時代の馬飼いを探る
3. 学会等名 日本動物考古学会第6回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 馬文化の東伝と加耶
3. 学会等名 加耶古墳群 世界遺産 搭載 研究 forum (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 古代東アジアの装飾馬具生産 現状と課題
3. 学会等名 金工品からみた古代東アジア世界の交流
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 植月学	4. 発行年 2022年
2. 出版社 帝京大学文化財研究所	5. 総ページ数 110
3. 書名 津軽中世馬の研究－青森県平川市大光寺新城跡遺跡出土動物遺体調査報告－	

1. 著者名 飯島武次、角道亮介、鈴木舞、大日方一郎、湯沢丈、菊地大樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 外為印刷	5. 総ページ数 135
3. 書名 秦の淵源：秦文化研究の最前線	

1. 著者名 松井章、丸山真史、菊地大樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新泉社	5. 総ページ数 378
3. 書名 松井章著作集 動物考古学論	

1. 著者名 鈴木舞、飯島武次、焦南峰、梁雲、角道亮介、大日方一郎、曹龍、菊地大樹、平勢隆郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター	5. 総ページ数 97
3. 書名 秦の淵源：秦文化研究の最前線：2021年6月20日開催国際シンポジウムより	

1. 著者名 鶴間和幸、鈴木舞、杉浦仁誼、菊地大樹	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京新聞、フジテレビジョン	5. 総ページ数 208
3. 書名 兵馬俑と古代中国～秦漢文明の遺産～	

1. 著者名 右島和夫（監修）、青柳泰介・諫早直人・菊地大樹・中野咲・深澤敦仁・丸山真史（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 334
3. 書名 馬の考古学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	丸山 真史 (Maruyama Masashi) (00566961)	東海大学・海洋学部・准教授 (32644)	
研究分担者	菊地 大樹 (Kikuchi Hiroki) (00612433)	総合研究大学院大学・先導科学研究科・特別研究員 (12702)	
研究分担者	武井 紀子 (Takei Noriko) (30736905)	日本大学・文理学部・准教授 (32665)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	庄田 慎矢 (Shoda Shinya) (50566940)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・企画調整部・室長 (84604)	
研究分担者	覚張 隆史 (Gakuhari Takashi) (70749530)	金沢大学・古代文明・文化資源学研究センター・助教 (13301)	
研究分担者	諫早 直人 (Isahaya Naoto) (80599423)	京都府立大学・文学部・准教授 (24302)	
研究分担者	平野 修 (Hirano Osamu) (90620865)	帝京大学・付置研究所・講師 (32643)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関